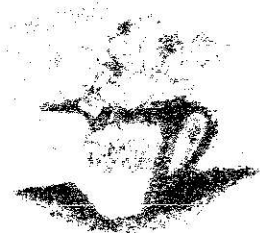


さくら・志津 憲法9条をまもりたい会

— 戦争をしない・させない・命がだいじ —



日本国憲法第9条
 (戦争の放棄、軍備及び交戦権の否認)
 ① 日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は国際紛争を解決する手段としては永久にこれを放棄する。
 ② 前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。

〈いまの日本、自由なの?〉

志津コミュニティセンターや西志津ふれあいセンター、志津市民プラザ(志津公民館)など公共施設に様々な活動をしている市民の作成したチラシや案内などを置いているが、私たちの会も不定期に発行しているニュースを十数年前から置いている。最近のニュース(39号)をいつものように置かせてもらうよう依頼したところ、政治的な内容のニュースなので、置けないと言われた。今まで拒否されたことが無かったので驚き抗議したところ、「上の者と相談してから連絡します」と受け取ってはくれた。一週間後行ってみたら置かれてはいた。

あいちトリエンナーレの中止(市民運動により再開)、9条俳句の不掲載(「公民館だより不掲載は違法、最高裁で確定」2018/12/20、その後さいたま市教育長謝罪)、等々あらゆるところでの市民への監視や締め付けが横行しだしたように感じられる。じわじわと自由な発言ができない社会になってきていると思うのは私の思い過ごしなのでしょうか。(GM)

私たちの会は、発足当時から市内にある、四つの県立高校生を対象に高校前宣伝に大きな力を注いできました。会のニュースや高校生向きに作ったチラシを配ります。選挙権をもつ高校生にも、憲法を守り憲法に掲げられている平和主義の大切さを考えて欲しいからです。配布の際は、校門内に入らないという制約はこれまでもありましたが、昨年配布を実施した2校での学校側の対応には少々戸惑いを感じています。これまで以上に細かい注文や指示が多くなっています。配布する人数が多いのか少ないのか、校門から離れて行動して欲しい、できれば校門前ではなく最寄りの駅前配布してはどのアドバイスまで、かなり露骨です。公立高校という教育の現場でもこのようになってきています。教育の場も含めて地域社会が閉塞していくようなことではなく、開かれていくような地域社会になって欲しいと願わずにはられません。(KT)

僕の前に道はないのか～アテにならない人たち

僕の前に道はない／僕の後ろに道はできる／ああ、自然よ
／父よ・・・

国語の教科書で、この詩と出会い、声に出して朗読しているときの心地良さがよみがえる人も多いのではないか。高村光太郎の「道程」と題する詩である。智恵子は東京に空が無いといふ、／ほんとの空が見たいといふ。・・・



高村光太郎（山小屋書齋にて）
1951/10月阿部徹雄氏撮影提供

高度経済成長期の公害問題が深刻化する中で、しきりに引用されたこのフレーズは、『智恵子抄』の「あどけない話」であったことを私も後で知った。

この詩人高村光太郎（1883～1956）は、1941年12月8日、太平洋戦争開戦の二日後には、「十二月八日」と題して詩を作り、翌一月号の『婦人朝日』に発表した。

記憶せよ、十二月八日、／この日世界の歴史あらたまる。／アングロ・サクソンの主権、
／この日東亜の陸と海とに否定さる。・・・

また、1945年4月、東京の自宅を空襲で失い、8月15日、疎開先の花巻市郊外で「玉音放送」を聴いた光太郎は「一億の號泣」と題して、8月17日の『朝日新聞』に寄稿している。

論言一たび出でて一億號泣す。／昭和二十年八月十五日正午、／・・・／玉音（ぎょくいん）の低きとどろきに五體をうたる。／五體わななきとどめあへず。／玉音ひびき終りて又音なし。／この時無聲の號泣國土に起り、／普天の一億ひとしく／究極に向つてひれ伏せるを知る。・・・

太平洋戦争下、光太郎は、「シンガポール陥落」（1942年2月）、「アッツ島玉砕」（1943年5月）、「米軍の沖繩本島上陸」（1945年4月）との「大本营発表」があれば、即座に、新聞社やNHKの要請に応えた。ラジオは「愛国詩」の朗読を流し、新聞や雑誌は競うように光太郎の詩を載せ、国民の士気をあおり、愛国心を駆り立てた。「婦人」や「少国民」向けの雑誌にもよく登場した。ラジオで最も多く繰り返し放送されたのは、「最低にして最高の道」（『家の光』1940年9月）であったという。

もう止そう。／ちいひさな利欲とちひさなと不平と、／ちひさなぐちとちひさあ怒りと、
／さういふうるさいけちなものは、／ああ、きれいにもう止そう。・・・

また、「今上陛下指したまふところ、／われらよろこびおもむくなり、／あきらけきかな、おおいなるかなけふの賀節（よきひ）」（「ことほぎの詞」1942年2月）、「一切を超えて高きもの、／一切を超えて聖なるもの、／金色の菊花御紋章。」（「海軍魂を詠ず」1943年5月）などのように、神州の国を、天皇を、うたい上げ続け、日本文学報国会における詩歌部会長という要職も務めた。

ところが、光太郎は、敗戦後も、疎開地の山小屋に留まり、「暗愚小傳」と名付けた 20 篇の詩を『展望』（1947 年 7 月）に一挙発表すると、これらの作品は、戦時下の自らの活動を反省し、戦争責任を引き受けたとして、その深い深い「自省」を高く評価された。しかし、山小屋生活といえども、多くの地元の人々や知人や東京の編集者らに支えられての暮らしであった。1946 年 2 月、預金封鎖と新円切り替えがなされ、財産税が光太郎にもふりかかる。東京の弟との手紙で、光太郎の預貯金は 5 万 6000 円、亡父高村光雲の家が 10 万円と査定されたことがわかる。それがどれほどのものか。

ちなみに私の父が残していた「国債貯金通帳」によれば 1945 年 4 月の空襲直後疎開先の銀行で便宜代払いを受けたのが 200 円と 136 円で残高ゼロとなっていた。その一方で、新しい「国債貯金通帳」と「報国貯金通帳」にも 10 円、2 円の単位で貯金していた。父は、空襲で借家の店を失うまで、池袋で薬屋を営み、一家 5 人を支えていた。光太郎の山小屋生活といっても、私たちの疎開先や焼け跡のバラック暮らしの困難さ、家族を失った者の悲しみを想像できただろうか。

光太郎は、やがて、東京に戻り、彫刻を再開、十和田湖畔に立つ「乙女の像」の作成にあたる。その晩年には、つぎのような詩を発表する。唯一の被爆国にあって、1954 年「第五福竜丸」の被爆体験、日本学術会議の原子力研究の自主・民主・公開の三原則声明、水爆禁止署名運動などが続く中で、光太郎は、つぎのフレーズで終わる「新しい天の火」（『読売新聞』1955 年元旦）を発表した。

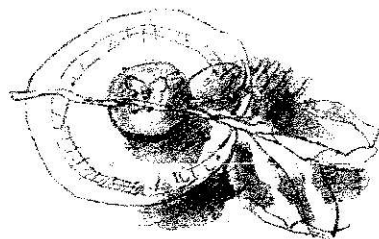
新年初頭の雲間にひかる／この原始爆発大火団の万能を捕へよ。／その光いまこのドームに注ぐ。／新しい天の火の如きもの／この議事堂を打て。／清められた新しき力ここにとどろけ。

また、光太郎最晩年の「生命の大河」（『読売新聞』1956 年 1 月 1 日）には、つぎのような一連があった。この発表の直前 12 月 16 日には原子力基本法など関連三法が成立し、まさに新年一月一日に施行している。発足した原子力委員会の初代委員長が『読売新聞』社主正力松太郎であったのである。

放射能の克服と／放射能の善用とに／科学は万全をかける。／原子力の解放はやがて人類の一切を変へ／想像しがたい生活図の世紀が来る。

ときの政府を支え、メディアへの要請に応え、いとも簡単に「原子力平和利用神話」へとなだれ込んで行く。あの敗戦後の「自省」は何であったのか。

この詩人の在りようは、現代の文化人や有識者の作品や発言と決して無縁ではない。引退した保守政治家や退職後の高級官僚がにわかに饒舌になったり、役職や勲章がちらつき、メディアの出番が多くなったと思ったら、いつの間にか発言がトーンダウンしたりする人がなんと多いことか。イチローよ、国民栄誉賞は、もらってくれるな?!（内野光子）



パロアルト散歩

家族が住むアメリカ合衆国・カリフォルニア州・スタンフォードで夏の時期を過ごしていますが、パロアルトは大学のキャンパスの外側にある町で、シリコンバレーの中心都市のひとつでもあり、町にはハイテク企業の立ち並ぶ広い通りがあります。住宅街の家並みは、どこも緑に包み込まれるような佇まいが印象的です。

街中の移動にはよく自転車を使いますが、専用レーンが整備され、とても走りやすいです。チャイルドトレーラー（自転車用ベビーカー）に子供を乗せて自転車で牽引して走っているのもよく見かけました。子供が乗るスペース全体が覆われているので安全で快適そうです。走行時のヘルメット着用はごく普通のスタイルで、蛍光色のジャケットを着る人も多く、安全意識の高さ感じます。町にある鉄道の駅からサンフランシスコまで約1時間、列車は全てダブルデッカー（2階建車両）で、自転車ごと乗り込める車両と車椅子スペースのある車両が連結されており、自転車族にはとても便利だと思います。

ぶらりとお散歩では、よく見かけるリスの他に、運が良ければ野うさぎのジャックラビット（種）にも出会えます。夏の引越シーズンには、歩道にフリーと書かれた家具や雑貨がボンと置かれ、欲しい人が持ち帰ります。私も暖炉のファイヤーセットをGET! レモンツリーの下に収穫したレモンをバケツにどうぞと置かれていたこともあります。

町にはグットウィルというお店があり、障害のある人やホームレスなど社会的弱者の人達の雇用と職業訓練を目的に運営されているので、寄付や購入でサポートができます。

ダウンタウンの商店街一角にある、1925年オープン、古いハリウッド映画専門のスタンフォードシアターがユニークです。館内の壁には古い映画のポスターが貼られ、アールデコ様式の内装が美しいです。上映中の観客の様子がなんとも楽しくて、ミュージカルでは一緒に歌いだす人まで、最初はちょっとうるさいな—と思った私も、途中から同調モードに突入、この雰囲気は新鮮です。夜の回にはスクリーン下からオルガンがせり出してきた生演奏を聴かせてくれます。こんな素敵なおまけつきで、大人7ドル、シニアは嬉しい半額です。

スタンフォード大学が夏休みに入ると、“スタンフォード・ジャズフェスティバル”と称して多彩な演奏家によるコンサートが数多く開かれます。大学のキャンパスには、新旧2つのコンサートホールがありますが、ピン・コンサートホールで聴いた上原ひろみのジャズピアノは最高でした。街の大きなショッピングセンターでも、週末無料の野外ジャズコンサートが催され、住人たちはワインや食べ物を持ち込んで、ワイワイ楽しんでます。

ハイテク企業関係の高額所得者が多く住む町ではありますが、行き交う人々はカジュアルでフレンドリーです。豊かな自然に溶け込んだ穏やかな日常は、今の世界では最も贅沢なことなのかもしれません。(K.U)

代表：高塚 一成 『さくら・志津憲法9条をまもりたい会』連絡先 (Tel & Fax) 043-487-1350

(中河), 043-488-0537 (前田) ブログ <http://sakurasizu9jo.cocolog-nifty.com/>

＝世話人＝伊藤繁子(上座)内野光子(宮ノ台)大野博美(ユーカーが丘)高塚一成(上座)中河幸(上座)服部かをる(御宿)前田銀子(宮ノ台)前田泰久(宮ノ台)向山尚子(上座)K・Y(宮ノ台)伊藤寿子(宮ノ台)内田恵子(宮ノ台)S(宮ノ台)